OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランス人民党 1936-1940年 (2)
Author(s)	竹岡, 敬温
Citation	大阪大学経済学. 2013, 63(3), p. 39-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57102
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フランス人民党 1936 － 1940 年（2）

竹 岡 敬 温[†]

3. フランス人民党はファシストか

フランス人民党はファシスト政党であったのか，なかったのか。1936 － 1939 年のフランス人民党について論じた歴史家たちは，同党をファシズム的傾向をもったフランスで唯一の大衆政党であったということを認めながらも，なお，同党を「言葉の純粋な意味での」あるいは「真正の」ファシスト政党と呼ぶことには，若干のためらいをみせている。

プリュミエーヌおよびラジエラがフランス人民党を「正真正銘のフランスのファシスト」とみなした[102]のにたいして，ルネ・レモンは「1930 年代のフランスに外国のファシスト政党と類似性を示す政党があったとすれば，それはまさしくジャック・ドリオによって結成され指導された党であった」，「いずれにせよ，フランス人民党は，愛国青年同盟，アクシヨン・フランセーズ，火の十字架団などの組織には欠けていた――右翼と左翼との混合，すくなくとも一時的には，この両者からやってきた分子の混交という――外国のファシズムと共通の特徴をもっていた」といいながらも，「フランス人民党は，ファシスト・タイプの政党にもっとも近い形態をあらわしてはいたが，しかし，それも，同党の党員たちの入党動機とその運動の基本的性格について強い疑問が残るという留保をつけてである」とつけくわえている[103]。ディーター・ヴォルフも，「ドリオの党がフランスのファシズムに向かう唯一の真剣な衝動であったという主張には全面的に同意するが，しかし，たんなる衝動を正真正銘のフランスのファシズムであったとするのは誤りである」と書いていて，断定的に結論するのを躊躇している[104]。ジャン・ポール・ブリュネはフランス人民党を真のファシストであったと考えてはいるが，同時に，かれは「フランス人民党のファシズムは，同党がもっていた可能性を最大限には実現できなかった」と指摘している[105]。また，回想録を残している同時代のフランス人民党の活動家たちも，この点にかんして明確に肯定的な答をあたえてはいない。

多くの歴史家や同時代の活動家たちがフランス人民党を「真正の」ファシスト政党と呼ぶことに戸惑いを覚えたのは，ひとつには，結党後，同党の幹部たち，とりわけドリオ自身が当時みずからをファシストとは認めなかったからであろう。1934 年 6 月から 1936 年初めまでの期間の論説や演説を編纂して 1936 年 7 月に公刊した著書『フランスは奴隷の国にはならない』のなかで，ドリオはかれが反ファシストでありつづけ，人民戦線を支持することを強調して，「われわれは人民戦線の側に立ち，ファシズムに反対する。われわれは，否定的で防御的な反ファシズム以上のものをもたらさなければならず，恐慌を克服する政策綱領あるいは行動計画によってそれを緊急に補わねばならないと

† 大阪大学名誉教授

102) Jean Plumyène et Raymond Lasierra, *Les fascismes français 1923-1963*, Editions du Seuil, Paris, 1963, p.110.

103) René Rémond, *Les Droites en France*, Aubier, Paris, 1982, pp.216-217.

104) D. Wolf, *op. cit.*, p.449. 平瀬・吉田訳では，この部分は訳出されていない。

105) J-P. Brunet, op. cit., pp.273-274.

さえ考えている。ファシズムを打ち破ることができるのは，恐慌とたたかうことによってであるからである」と書いている[106]。また，ロベール・ルーストーは，1936年10月10日の『国民解放』紙で，「われわれはファシストとはほど遠く，それどころか，民主主義者である。われわれが，言葉の嘘の下に，一握りの資本家や政治屋の成金たちの偽善的暴政を隠している，現行の民主主義の形態を拒否するのは，そのためである」と書いている[107]。

フランス人民党がみずからをファシストと認めようとはしなかったのは，同党が共産党を離党したばかりの多数の元共産党員によって構成されていたからであろう。1934年2－6月におけるドリオの共産党指導部への離反は，労働者階級を分裂状態に置きつづけてファシズムの台頭を許している共産党を非難して，断固とした反ファシズムの路線上でおこなわれたものであった。1934年10月にドリオによって組織された「サン・ドニ地区多数派」は，「革命的統一」と「反ファシズム」を基本的な絆としていた。1934年10月6日，サン・ドニ市立劇場で開かれた「サン・ドニ地区多数派」の会議で唱われた「われらを脅かすファシズムを前にして／君たちよ，われわれの隊列に加われ／前進せよ，サン・ドニ，前進せよ！」という歌は，ドリオとその仲間たちの明確な反ファシズムの政治姿勢をあらわしていた[108]。

ファシズムを告発してわずか2年足らずのちにファシズムの傾向を公然と表明するのは，多数の元共産党員を途方に暮れさせ，その戦意を喪失させたことであろう。また，社会が完全に不安定化しないかぎりは，大部分の中産階級はファシズムに敵対的であった。フランスではまだそのような状況の到来は予想されず，もし中産階級に反感をもたれれば，フランス人民党はその有力な支持者を失うであろう。フランス人民党が非合法的行動に走り，ましてやクーデタを準備していると知れたならば，紛れもなく，それはドリオにとっては政治的自殺を意味したことであろう。そのため，ドリオとフランス人民党は，たとえファシズムへの志向をもっていたとしても，その本当の意図を隠さねばならなかったのである。ドリオがみずからをファシストと主張しなかったのは，フランス社会がファシズムによる打開策を必要とするまでに機が熟していないと，かれにはおもわれたからであったろう。

しかし，この姿勢はあまり長くは続かなかった。この時期のドリオは，公に話すときよりは，信頼できる側近との私的な会話のなかでのほうがかれの政治的立場をはっきりさせたようである。

1936年10月初めにドリオに会いにきたヴィクトル・バルテレミーにたいして，かれは「わたしがファシストであるかどうかは知らない。ファシズムは真似されるものではない。いつだったか，“ファシズムは輸出品ではない”といったのはムッソリーニだとおもうが，わたしはムッソリーニもヒトラーも真似しようとはおもっていない。わたしは，フランス人民党とともに新しいスタイルの政党をつくりたいのだ。フランスの他のどの政党にも似ていない政党，階級を超越した政党をつくりたいのだ。長いあいだ，わたしは階級闘争が革命の本質的要因だと信じてきた。しかし，いまは，そんなふうに信じてはいない」と語っている[109]。当時，バルテレミーはまだドリオの親密な側近になっていはいず，ドリオは，かれがイタリアやドイツの経験を盗作するつもりは毛頭ないなどといって，自分がファシストであるというのは避けたのであろう。

[106] Jacques Doriot, *La France ne sera pas un pays d'esclaves*, Les Œuvres françaises, Paris, 1936, p.25.
[107] *L'Emancipation nationale*, 10 octobre 1936.
[108] J-P. Brunet, op. cit., p.256; J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.246.
[109] V. Barthélemy, *op. cit.*, p.104.

しかし，ファシズムの経験は国によってきわめて多様であり，ファシスト国家同志でも，かならずしも，たがいに全面的な親近性をもっていたわけではない。1935 年 4 月には，ムッソリーニは，イギリス，フランスとともに，ヒトラーに対抗する「ストレーザ戦線」を組み，ドイツの再軍備に抗議したのであり，「ベルリン・ローマ枢軸」の結成は 1936 年 10 月まで実現しなかった。それぞれの国のファシストたちは，自国の利益を優先させて，たがいに共感をもたず，憎み合うことさえあった[110]。ファシズム体制がとる政治形態あるいは政府形態は，それぞれの国の伝統，運動組織や指導者の性格によって，ときに顕著に異なっていた。フランスの政治団体がファシストになるためには，イタリアのファシズムも，ナチズムも盗作する必要はなかった。

ヴィクトル・バルテレミーと別の機会に交わした会話のなかで，ドリオはファシズムを定義して，「ファシズムについてわたしが大いに研究したと信じてほしいのだが，ファシズムは秩序ではない。いずれにせよ，秩序だけなのではない。ファシズムとは，第一に，革命なのだ」といっている。また，共産主義については「われわれは，共産主義が革命であると信じてきた。われわれはだまされていたのであり，共産主義は，共産主義が 20 年来権力を握っているロシアにおいてさえ，革命を起こしてはいない。1917 年の革命を起こしたのは共産主義ではない。空論家たちの意見に反対して革命をなしとげたのは，天才のレーニンなのだ。しかし，その後，ロシアの共産主義はスターリン主義というおかしな物品を覆い隠す小屋にすぎなくなった。スターリン主義というのは，汎スラヴ主義の近代的形態にすぎない」といっている[111]。裏切られた革命家ジャック・ドリオの目には，ファシズムはなによりも革命に向かっての飛翔と映ったのであろう。

1914 － 1918 年の大戦が終わったあと，1920 年代の経済的繁栄によって一時安定したかにみえたフランスの政治体制は，1930 年代には，世界恐慌の波及と長期的な不況を前にして，その無能ぶりを露呈し，第 3 共和制の慢性的な不安定は増幅した。このような状況こそが，広範な領域でフランス社会にたいする異議申し立てがおこなわれた背景であった。そして，共産主義とファシズムは，このような 1930 年代の時代精神を共有していたのである。もちろん，共産主義とファシズムとの相違は小さくはなく，マルクス主義が原則として史的唯物論に基づく全体的に首尾一貫した体系を構成しているのに反して，ファシズムの教義は不鮮明で，変わりやすく，ときには衝動的である。しかし，両者は「ブルジョワ民主主義」の政治体制と経済制度，その不公正な社会，無能で時代後れの，しばしば政争の具にしか役立たない議会民主主義にたいする同じ憎悪を分け合ったのである。

それにくわえて重要なのは，今日のファシズムの研究では，他のいかなる政治思想よりも，ファシズムではイデオロギーが重要な場所を占めてはいないということが，一般に認められるようになったことである[112]。すなわち，最近のファシズム解釈では，イデオロギーが行動の根

[110] その例をひとつあげよう。ベルトラン・ド・ジュヴネルの証言によれば，かれがフランドルのファシスト団体の指導者ヴァン・セヴェレンを訪問したとき，ヴァン・セヴェレンが「わたしはヒトラー支持者たちが大嫌いである」とはっきりいったという。「そのことは，わたしには，奇妙なというよりむしろ面白くおもわれた。要するに，国家（原文イタリック）社会主義は，本来，国際主義ではないからだ。かれが，かれの国にとって脅威となっている人物にたいして共感を抱く理由はまったくない。そして，実際，ヒトラーはフランドルを併合するつもりだったのである」とド・ジュヴネルは書いている。B. de Jouvenel, *op. cit*., p. 223.

[111] V. Barthélemy, *op. cit*., p. 103.

[112] Emilio Gentile, *Qu'est-ce que le fascisme? Histoire et interprétation*, Gallimard, Paris, 2004, p. 102; Robert O. Paxton, *The Anatomy of Fascism*, Alfred A. Knopf, New York, 2004, p. 219, (traduction française) *Le fascisme en action*. Editions du Seuil, Paris, 2004, p. 374.

源にあるのではない[113]，と考えられている。もちろん，ファシズムの研究から思想を追放することはできないが，しかし，思想をファシズムという複雑な現象に影響するさまざまな要因のなかのひとつとして位置づけなければならない。そして，ファシズムの行動の基礎にある思想は，それらの行動自体から推論されなければならない。それらの思想のあるものは暗黙のままであり，ファシストの公的な発言のなかには表現されないからである。それらの思想の多くは，理性的な言語の領域よりも情動や感情の領域に属しているものなのである。

したがって，フランス人民党が本当にファシスト政党であったのかという問いにたいする答は，なによりも，その行動のなかに探らなければならない。元『ユマニテ』紙の記者であったポール・ギタールも，『国民解放』紙上で，つぎのように書いている。「行動こそがフランス人民党の本質である[114]。」

1936年11月の第1回全国大会のときから，フランス人民党の行動にはあいまいさがなかったようにおもわれる。大会参加者たちは，大会全体をつうじて儀式的なしきたりを採用し，それは最後まで続いた。まず，宣誓である。誓いの言葉は，つぎの通りであった。「人民と祖国の名において，わたしは，フランス人民党に，その理想に，その党首に，忠誠と献身を誓います。わたしは，共産主義と社会的利己主義にたいするたたかいに全力を捧げることを誓います。わたしは，新しい，自由な，独立したフランスが生まれるための国民的，人民的革命の大義に最高の犠牲を払うまで奉仕することを誓います[115]。」宣誓はすべての党員に唱えることが要求された。

つぎに，「党首」あるいは「党首」から権限を委託された集会の議長にたいしておこなう敬礼の動作である。「サン・ドニ地区多数派」の時代には，共産党員や社会党員と同様，こぶしをあげながら「インターナショナル」が歌われたが，それに代わって正式に採用されたのは，「掌を開いて指をそろえた右手を顔の高さまでわずかにあげて前方に差し出す，要するに，士官が兵士たちにかれに続いて前進するよう合図する動作[116]」であり，それは「ローマ式」モデルにすこし手を加えたものであった。ドリオがイタリアのファシストやナチスの挨拶の平板な模倣を避けたのは，おそらく，そのようなことをすれば，外国に盲従しているとおもわれたからであったろう。しかし，党機関紙に広く掲載された説明や写真にもかかわらず，このような動作をすべての党員に正確におこなわせることはむずかしかった。それは，自然に，ローマ風ないしはナチス風挨拶にとって代わられ，集団的奮起，気力発揚，党員と党首とのあいだの熱狂的接触を意味するものとなった。サビアーニ指揮下の「マルセイユ独立共和国」では，最初から，この形式の挨拶が採用された[117]。

フランス人民党の儀式のなかで，党旗の展示

---

[113] Paul Veyne, *Comment on écrit l'histoire. Essai d' épistémologie*, Editions du Seuil, Paris, 1971, pp.235-277.

[114] *L'Emancipation nationale*, 4 novembre 1938.

[115] D. Wolf, *op. cit.*, p.194, 平瀬・吉田訳, p.202; J-P. Brunet, op. cit., p.270; J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.249. ドイツ大使ヴェルツェックは，ベルリン宛ての報告のなかで，1936年11月のフランス人民党第1回大会の儀式の大部分がナチズムからの借り物だと知らせている。また，パリ旅行中，ベルトラン・ド・ジュヴネルに連れられて同大会に出席したグリム博士も，それが「フランス的痕跡」をとどめているとつけくわえながらも，同様の印象をのべている。Welczek (Paris), 19 novembre 1936, A 5189, *Politisches Archiv des Auswärtigen Amtes : Büro des Staatssekretärs / Frankreich, Pol, II*, p.108; Dr. Grimm, *Frankreich / Berichte*, 1934-1944, Hohenstaufen-Verlag, Bodman-Bodensee, 1972, pp.76-77; Ph. Burrin, *op. cit.*, p.283.

[116] Raymond Millet, *Doriot et ses compagnons*, Plon, Paris, 1937, cit. par Philippe Conrad, *Le Parti populaire de Jacques Doriot (1936-1939)*, mémoire de maîtrise, Université de Paris I, 1969, p.105; J-P. Brunet, op. cit., p.269.

[117] J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, pp.249-250.

と引き渡しは，ナチスの大集会に特有な本能の高揚をもっともよく思い起こさせる特徴のひとつであったろう。同党の党旗は，すでに 1934 年 6 月末の党結成大会――「サン・ドニの集い」――に出席した代議員たちに紹介されたが，その長方形の旗は 2 本の白い対角線によって 4 つの 3 角形に分けられ，上下の 3 角形は赤で，左右の 3 角形は青で染められ，対角線の交叉する箇所に党の略章である PPF という 3 文字が白地で抜かれていた。それは，フランス革命のときの連盟祭（1790 年 7 月 14 日のフランス革命 1 周年記念祭）の旗の再現であった。『国民解放』紙はそれを「またもや祖国が危険に陥っている（原文イタリック）現在の状況に再現された歴史の瞬間を想起させる」と同時に，「党派根性を知らず，すべてのフランス国民が共通の任務のためにひとつの情熱で結ばれた，寛大な共和国を思い出させるもの」と説明している[118]。党旗は，1936 年夏に何度もおこなわれた遊説旅行のあいだ，ドリオから党支部や県連に引き渡された。党旗を最初に受け取ったのは，サン・ドニ支部とともに，おそらくマルセイユ支部であり，マルセイユでは，既述のように，1936 年 7 月 26 日のプラド円形競技場での大集会で，サビアーニがかれ独特の方法で党首ドリオに忠誠を誓ったあと，引き渡されたのであった。

本来，党旗の象徴的意義は伝統的に左翼諸政党によって利用されてきたのであったが，それは，どちらかといえば，装飾的な旗であり，部屋の片隅にしまい込まれていた旗を会議の機会に取り出すだけにすぎなかった。しかし，フランス人民党では，党と党首とのシンボルである党旗は，大ぜいの党員たちから発散される高揚感を定着させるためのものであり，党首が県連や地方支部の責任者に党旗を引き渡したとき，それは指揮権の移譲，党首の権限を委任された者への帰属を意味し，旗手は党旗を振りかざして，天に向かって群衆の本能的飛翔を表明する一種の叫びをあげたのであった[119]。それは，独裁的指導体制と準軍隊式服従への象徴主義の活用であったろう。

党のバッジについていえば，最初，「大会で採用されたバッジは，たんに赤い 8 辺形のなかに刻まれた PPF の 3 つの頭文字からなるだけであったが，その後，このバッジは変更され，党旗の図柄を再現し，ケルトの十字架に似たガリアの戦斧を図案化したものが採用された」（ヴィクトル・バルテレミー[120]）。それはまた，ナチスの党章，かぎ十字にも似ていた。

また，フランス人民党第 1 回全国大会のときに，はじめて，「フランスよ，汝を解放せよ！」という党歌が演奏された。それはひとりの冶金工によって作詩され，ひとりの銀行員によって作曲されたもので，2 人ともサン・ドニ市民であった。歌詞の最後は「至向の目的をめざして，フランスの子よ，君に呼びかけるドリオの声に耳傾けよ」という呼びかけで終わっていた。ディーター・ヴォルフは，この党歌を「その歌詞は反共産主義のたたかいのきまり文句を集めて詩にしたおそまつなものでしかなく・・・全体として“ラ・マルセイエーズ”の下手なコピーであり，すべての示威集会で確実な成功をもたらすことまちがいない，仰々しさと情熱と感傷のありふれた混合物である」と書いている[121]。

実際，「フランスよ，汝を解放せよ！」は，その平易なメロディーのせいで，党員たちによってかんたんに覚えられ，党のすべての大集会で，熱狂的な雰囲気のときには開会時に，いつもは閉会時に「ラ・マルセイエーズ」のまえに歌われた。演説の途切れたときや集会の終わ

[118] *L'Emancipation nationale*, 1er août 1936.

[119] J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p. 250.

[120] V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 111.

[121] D. Wolf, *op. cit.*, pp. 194, 474-475, 平瀬・吉田訳, pp. 202, 420-422.

りにあげられる歓呼の声の続くなか響き渡ったスローガンは，もはや「前進せよ，サン・ドニ！」ではなく，「前進せよ，ジャック・ドリオ！」であり，「フランス人民党は勝利する」であった。

さらに，フランス人民党は，党の「大義に殉じた死者」の栄誉をたたえるために，イタリアのファシスト党やナチスにならって，スペインのファランヘ党の儀式の慣行をとりいれた。1936年夏，シディ・ベル・アベス（アルジェリア，オラン県）でひとりの党員が殺害された。翌年の7月14日には，マルセイユで，デモのあとにつづいて起こった乱闘の結果，党の旗手が殺された。かれを殺害した組合活動家は，10年の懲役刑を宣告された[122]。1938年1月には，またもやマルセイユで，ひとりの党員が命を落とした。ドリオは，1938年3月のフランス人民党第2回全国大会でおこなった長い演説を採録した著書『フランス改造[123]』を3人の犠牲者に捧げた。かれらの葬儀のときには，党首かかれの代理が死んだ闘士の名を3度叫び，そのたびに参列者はまるで兵士の点呼のように「はい！」と答え，つづいて「フランス人民党の同志は？」という問いかけにたいして，参列者は「前進せよ，墓石を越えて」と応じた。死者への呼びかけは，ほとんど神秘的な感情，死者を悼む悲しみとともに超越的な興奮を生んだ[124]。

党首の呼びかけに奮い立った党員たちが本能的に「元型的な[125]」（ユング）行動をとったこれらの大げさな儀式では，式の進行順序や儀礼的しきたりはもとより，演壇の下や部屋のところどころに整列し，青色の基調の制服（腕章をつけたライトブルーのシャツ，濃紺のズボン，褐色の負い革，バスク・ベレー）を着用し，革帯できちんと体を締めつけた警備係にいたるまで，すべてが参列者の精神を感動させるように配置されていた。教義や社会学的な判断基準以前に，ファシズムをおもわせたのは，フランス人民党のこのような態度の全体であった。本能や「生命の自然的な力」（ピエール・ドリュ・ラ・ロシェルの表現[126]）の称揚，思考よりも行動の優先――皮肉なことに党のすべての知識人がそう主張した――が，同党のファシズムをもっともよくあらわす徴候のようにおもわれる。そして，この点で，フランス人民党のケースはあいまいさがなかった。

しかし，制服の着用は，警備係のメンバーと25歳以下の党員を集めた「フランス青年人民同盟」の「ピオネール」（ドリオ少年団）たちだけに限られて，一般党員には禁じられ，1940年以前のフランス人民党は，イタリアやドイツのファシズムの特徴であった準軍隊的性格の外観を呈してはいなかった。フランス人民党結党以前からドリオは戦闘的な反軍国主義者であり，おそらく，フランス人民党の――すくなくとも結成当初の――活動家たちの強固な中核をなしていた共産主義文化のために，長いあいだ絶対悪とみなされてきた外国あるいは国内の軍隊的モデルに，党員の衣服や身振りを追随させるのはむずかしかったのであろう。こうして，一般の党員たちに制服を着せることは断念されたのであり[127]，同様に，治安維持の仕事を党本

[122] *Archives Nationales*, F^{7} 14817, note du procureur général près la Cour d'Appel d'Aix au Garde des Sceaux, le 8 juillet 1938.

[123] J. Doriot, *Refaire la France, op. cit*., Grasset, Paris, 1938.

[124] *L'Emancipation nationale*, 28 janvier 1938,《Les journées de Marseille et d'Aubagne》; Ph. Conrad, *op. cit*., p.106; J-P. Brunet, op. cit., p.270; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du Communisme au fascisme*, *op. cit*., pp.251-252.

[125] 民族が先祖から受け継ぐ無意識の心理の型（ユング）。

[126] *L'Emancipation nationale*, 8 juillet 1938.

[127] フランス人民党の集会は，政権掌握後のナチスの集会のようには軍隊化されてはいなかった。参加者のほとんどは制服を着用せず，兵士のような隊列を組んではいなかった。しかし，警備係のメンバーだけは制服を着用し，会場の正面の壁をおおう大きな党旗を背景幕にして，聴衆を見下ろす巨大な演壇の下で，制服――腕章をつけたライト・ブルーのシャツ，ダーク・ブルーのズボン，茶色の肩ベルト，バスク・ベレー――を着用した警備員の一団が立っていた。R. Soucy, *op. cit*., p.218, (traduction française) *op. cit*.,

来の使命のひとつとすることは，党則のなかではっきりと禁じられた[128]のであった。

これにたいして，フランス人民党による暴力の使用は，それが往々にして「対抗暴力」であったことを考えるならば，かならずしも同党のファシズムの不可欠な要素であったとはいえない。この点にかんして，ドリュ・ラ・ロシェルは，1936 年 12 月 12 日の『国民解放』紙に寄稿した論説「フランスと暴力[129]」のなかで，共産党員を含むフランス国民全体を説得するためにドリオがとっている方法は「慎重で鷹揚である」が，しかし，共産党員のなかの「数千人の扇動者」や「暴力的人間たちにたいしては，有効なのは暴力でしかない。したがって，われわれの行動には，避けられない暴力というものがあることを知らなければならない」と書いている。そして，そのような場合にそなえて，ごろつきや暴力団の手先を警備係に雇うことが，フランス人民党の日常的な慣行となったのである。パリ地域では，警備係のチームは多数の北アフリカの失業者を含む数百人（警察報告[130]によれば，パリ地域全体で 500 人から 600 人）の男で構成された。また，いつでも呼び出しに答えられるように，毎晩，自宅で待機中の 100 人ばかりのメンバーからなる特別部隊が編成され，党の集会場所から特別の車がこの部隊を「その存在が必要と判断された場所へ」送っていくことになっていた。けれども，フランス人民党の警備チームは準軍隊式集団を形成せず，党の内規では，警備チームは「どんな場合も，軍隊的性格の集団になってはならない」と明確に決められていた。警察の一報告も，「警備チームの構成員の大部分が元共産党員であり，“けんか好きの男たち”との評判をとっていたが，かれらはまた規律に欠けていることでもよく知られていた」と評している[131]。

パリとともに，フランス人民党がイタリアのファシスト党やナチスの行動をもっともよく連想させた地域は，地中海地域であった。ニースでは，フランス人民党は，共産党員との衝突のとき特別な警備を担当する合計 150 人ないし 200 人からなる，いくつかの行動グループを組織していた[132]。アルプ・マリティム県全体では，警備担当者は 1938 年には 500 人のメンバーからなり，既述したように，ジョゼフ・ダルナン[133]がその組織者であったが，かれは同時に秘密結社「カグール団」のメンバーであった。マルセイユでは，サビアーニの「プロレタリア軍団」が強力な警備組織をつくりあげ，フランス人民党結成以前から，すでに，なんらの教義ももたなかったにもかかわらず，つよくファシズムを感じさせていた[134]。

p. 311.

[128] Ph. Burrin, *op. cit*., pp. 282 - 283.

[129] P. Drieu La Rochelle, *L'Emancipation nationale*, 12 décembre 1936,《La France et la violence》, P. Drieu La Rochelle, *Avec Doriot, op.cit*., p. 102 に再録。

[130] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 337, dossier 2, pièce《Cabinet du Préfet…》et deux autres pièces (18 août 1937 et 22 décembre 1938).

[131] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 337, dossier 2, pièce du 22 décembre 1938,《AS de l'activité du Parti populaire français》.

[132] André Nouschi, De la grande crise à la Libération (1929 - 1945), in *Histoire de Nice et des pays niçois*, Privat, Paris, 1976, p. 404.

[133] ジョゼフ・ダルナンは，1923 年に加盟したアクション・フランセーズを 1928 年に脱退し，1936 年以後，しばらくのあいだフランス人民党のメンバーであったが，その間，同時に，秘密結社「カグール団」の活動にも参加した。ヴィシー政権下の 1941 年 8 月，ダルナンは準軍隊組織の「戦士団保安隊（SOL）」を創設し，1942 年 1 月，「戦士団保安隊（SOL）」がヴィシー政権によって公認され，その監督官に任命された。1943 年 1 月 31 日の法律によって，「戦士団保安隊（SOL）」は「フランス民兵団（ミリス）」に改組され，かれはこの対独協力組織の書記長となり，1943 年 12 月に治安担当大臣になったとき，「民兵団（ミリス）」をレジスタンスに対抗する全国的な準警察組織に格上げした。1945 年 4 月，ダルナンは，最後のイタリア・ファシスト党員たちに味方して，パルチザンとたたかうために北イタリアに移ったが，イギリス警察によって逮捕され，フランス側に引き渡されて，1945 年 10 月 3 日，高等法院によって死刑を宣告された。

[134] J-P. Brunet, op. cit., pp. 271 - 272; J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p. 253.

つぎに，フランス人民党の教義のなかに明確にファシズムの要素が存在したかどうかを検討することにしたいが，そのさい留意しなければならないのは，同党が政権を掌握することがなかったという事実である。ファシストが政権の座につかないかぎり，かれらは，世論からの受けを悪くしないように，その教義のいくつかの重要な点をぼかそうとするかもしれず，したがって，フランス人民党の主張全体を文字通りに受け取ってはならないであろう。教義の検討の仕事が困難を伴うのは，それだけが理由ではない。いまひとつの理由は，フランス人民党はその教義の基礎となる綱領を体系的にまとめた書物をもとうとはしなかったことである。同党のイデオロギーは若干の基本的思想のまわりにすこしづつ肉づけされていったのであり，ドリオ自身は，つぎつぎと小冊子のかたちで公表したかれの演説のなかで，党の指導理念を表明していったのである。

ドリオは，フランス人民党結成当初から，「反逆する労働者大衆をスターリンの使う杖の指揮の下に導いていった」資本主義とそのエゴイズムを告発した[135]。かれは，2つの前線において，すなわち，「しばしば共犯者となって国を滅ぼそうとする，資本家の200家族と共産主義の首脳部とに反対して」たたかわねばならない，と繰り返し主張しつづけた[136]。1936年6月の発足時のフランス人民党の綱領は，既成諸政党が「戦前の思想，方法，制度によって」フランスを統治し，その結果，「最大の豊かさのただなかに最大の貧困を生み出すにいたった，非整合的な生産の発達」を引き起こし，「同時に，むごい貧困が山積しているにもかかわらず，その一方であらゆる利己主義がはびこるのを許した」ことを非難した[137]。1936年11月のフランス人民党第1回全国大会でおこなった長い演説を採録した著書『フランスよ，われらとともに』のなかで，ドリオは，恐慌を生み出し，それを持続させている経済的自由主義を「完全に時代遅れ」の原理とみなし，この恐慌は，「たえず増加していく人口が食べるべき一切れのパンもなくなってしまうような事態の到来を望まないかぎり，経済運営の規則を完全に変えなければならないところにまで，経済発展が立ちいたったことを証明しているものだ」とのべている[138]。

フランス人民党の理論家で経済，社会問題の専門家ロベール・ルーストーも，「匿名資本主義[139]」とその「非人間的秩序」，「労働の商品化」を激しく非難している[140]。資本主義はプロレタリアを典型的人間とする工業文明を生み出し，「その発展の最終段階がマルクス主義の共産主義である」ならば，それはあらゆる悪の根源である，とかれは主張した[141]。ピエール・ドリュ・ラ・ロシェルもまた，巨大工場では，経営者と賃金労働者とのあいだには，さらに賃金労働者同志のあいだにさえ，もはやいかなる種類の人間的関係も存在せず，「人びとが，同じ企業のなかで，直接的で個人的な温い関係をまったくもたないで，一生のあいだ，一緒に働くことができるなどと考えるだけでも恐ろしい」と書いて，工場労働者の非人間的状態を告発した[142]。

このように，経済的自由主義は，ブルジョワジーがそれを利己的な目的に使用することに

---

[135] *L'Emancipation,* 4 juillet 1936, éditorial《Notre lutte》.
[136] *L'Emancipation,* 5 août 1937, éditorial《A Saint-Denis, le PPF fera la paix du monde》.「資本家の200家族」とは，フランス銀行の理事会が民間企業の代表200人によって構成されていたことに由来する表現。
[137] J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.254.
[138] J. Doriot, *La France avec nous!, op. cit.*, p.90.
[139] フランスでは「株式会社」のことを「匿名会社」という。
[140] *L'Emancipation nationale*, 15 octobre 1937; Robert Loustau, *Notre doctrine devant le problème sociale*, Bureau de la section des technichiens du PPF, sd., 20p.
[141] *L'Emancipation nationale*, 22 octobre 1937.
[142] *L'Emancipation nationale*, 26 decembre 1936,《Noël pour le peuple》.

よって，自由とは反対の制度をつくりあげたとして，断罪された。これにたいして，ポール・マリヨンが起草し，1938 年に公刊された『フランス人民党綱領[143]』のなかで，著者マリヨンが，フランス人民党がなしとげようとしている「わが国がかつて経験したことのない最大の社会改革」と呼んだものは，いったいなんであったのか。それは基本的には「労使協調団体主義（コーポラティズム）」であった。フランス人民党の労使協調団体主義は，企業の連帯性に基礎を置き，同一の工業地域，工業分野の事業所とそこで働く人びとの団体を組織し，全国の職業を管理する任務を担った同業組合評議会を設立するよう主張していた。その主張には特別な独創性はなかったが，ドリオは全体としてこれに満足していた[144]。

ドリオも，その著書『フランス改造』のなかで，階級闘争の解決策として労使協調団体主義（コーポラティズム）を提案[145]し，「企業の共通の利益」のうえに，「資本と労働とのあいだのよき調和」すなわち階級的連帯の基礎を築くべきだと強調し，「資本にとって利潤がなければ，労働者にとって仕事はない」という理由から，労働者にたいして経営者と協調するようつよく勧告している[146]。そして，「フランスの労使協調主義の同業組合においては，社会的騒擾や権利要求のストライキは不要になろう。労働者階級が，経済発展のどの瞬間においても，みずからがその正当な分け前にあずかり，生産増加の利益に浴することを知っているからである・・・また，同業組合は大企業の力を弱める工業の地方分権化，資本の民主化のいくつかの措置をとろうと計画することもできよう」とかれは書いている[147]。

ドリオ以前の極右同盟の指導者たちも，同様に，労使協調団体主義（コーポラティズム）を主張した。しかしながら，他の極右同盟の労使協調団体主義との重要な違いは，利潤のうちの経営者の取り分は政府の手によって「正当な」利潤だけに制限されるべきであり，余剰利潤は不幸な人びとを助ける社会福祉支出に，あるいは新しい機械，新しい技術の開発の融資に使用するための社会的基金に当てるべきだという提案をドリオがしたことであった。フランス人民党は，「社会的責任を負うことなく」資本を使用する大企業や金融機関にたいして異議を申し立てたのであり[148]，利潤を制限し，社会的基金をつうじて富の再分配を主張した点で，ドリオの提案はラディカルであった[149]。

いくらか独創的であったのは，企業経営にかんするフランス人民党のリーダーたちの「テクノクラート的」概念であった[150]。ドリオは，企業の責任についても利益の分配についても，経営者と労働者とが協力することによって，企業経営をもっと合理化するべきだと主張した。しかし，かれは経営者の権限を否定することはなく，逆に，企業内階層制の強化に賛意を表明したが，同時に，企業の技術者と管理職とが企業経営の責任者の指名に参加する権限をもつべき

---

143) Paul Marion, *Programme du Parti populaire français*, Les Œuvres nationales, Paris, 1938.

144) J-P. Brunet, op. cit., pp. 259 - 261 ; J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp. 254 - 256.

145) ゼーフ・ステルネルは，階級協調の主張がドリオの思想の柱のひとつであり，ドリオとフランス人民党のイデオロギーの全体が「連帯の原理（家族の連帯，コミューヌ・地域・企業・職業の連帯，それらの頂点としての国民の連帯）」に基礎を置いていたことを強調している。Zeev Sternhell, *Ni droite ni gauche. L'idéologie fasciste en France*, Editions du Seuil, Paris, 1983, pp. 183 - 184, 199, troisième édition refondue et augmentée d'un essai inédit, Fayard, Editions Complexe, Bruxelles, 2000, pp. 304 - 306, 322.

146) J. Doriot, *Refaire la France, op. cit*., pp. 42, 45, 98.

147) J. Doriot, *ibid*., pp. 99 - 100.

148) J. Doriot, *ibid*., pp. 46 - 47, 50, 98, 100.

149) これにたいして，サウシーは，ドリオの主張が，富裕層を優遇すると雫が滴り落ちて貧困層も潤うと主張する「滴り落ち理論」であったと評している。R. Soucy, *op. cit*., p. 250, (traduction française) *op. cit*., p. 350.

150) Pierre Milza, *Fascisme français. Passé et présent*, Flammarion, Paris, 1987, p. 173.

であるとした[151]。ロベール・ルーストーによれば，この「管理職の勝利こそ，数の暴力と金の暴力にたいする知性の勝利となる[152]」ものであった。

ロベール・ルーストーの書いた文章には，労使協調団体主義（コーポラティズム）にかんして当時流行していた思想の一種の綜合のようなものがみられる。かれはベルギー統一労働党の指導者でマルクス主義の修正を主張していたヘンドリク・デ・マン，1925年11月にフランス最初のファシスト集団，フェソー団を結成したジョルジュ・ヴァロワ，火の十字架団の委員長フランソワ・ド・ラ・ロック（とりわけその『公共の奉仕』）らの著書を読んでいた。さらに，おそらく，1933年10月28日の労使協調団体主義国家の樹立についての演説のなかで，「今日，われわれは経済的自由主義を葬り去らなければならない・・・労使協調団体主義（コーポラティズム）こそが規律正しく管理された経済なのである」と明言していたムッソリーニの影響を受けていたようにおもわれる[153]。ルーストーによれば，不況の続くあいだ，当分，労働者を含むすべてのフランス国民は，国と時代の経済的能力の範囲内に，その要求を制限すべきであり，ストライキは生産活動を台なしにし，労働者自身にとっても――ストライキが引き起こした物価騰貴がかれらが獲得したと信じる利益を無に帰させるであろうから――無益であり，「その解決策は，政治的影響から自由な，国民経済と社会正義にたいする配慮に基づいた国家の調停に服する，経営者と労働者との協力のなかにしかない」とかれは主張した[154]。

フランス人民党の労使協調団体主義（コーポラティズム）は，同業組合を国家と一体化した単一政党に奉仕させて，それを国家統制の道具そのものとした，イタリアのファシスト政権のようには，同業組合にたいする国家統制の強化を主張することはなかったが，全体としていえば，フランス人民党の経済・社会教義はファシズムのイメージに合致していた。しかし，それはもっとも革命的な側面を捨て去った「第2段階のファシズム」（ピエール・ミルザ[155]）であった。1936年6月の「サン・ドニの集い」のあと採用されたフランス人民党のマニフェストは，「われわれの党は社会的で革命的である」と明言し，ドリオ自身も盟友との会話のなかでファシズムの革命的性格を強調し，資本主義を非難することを忘れなかったが，しかし，ポール・マリヨンが起草した『フランス人民党綱領』は，資本主義を拒否せず，労使協調団体主義（コーポラティズム）を説いた。それは，この時代の右翼や極右団体全体に共通の主張であった。ロベール・ルーストーが1936年にあらわした『社会正義，人間的経済[156]』は，まだ，当時ほとんど元共産党員で構成されていた政治局によって支持されたフランス人民党の最初の綱領であるが，そこで展開された主張も同様であり，その経済・社会プログラムは国家社会主義の道に深く踏み込んだものではなく，企業の国有化も，私有財産の制限も，利潤の自由な使

[151] J-P. Brunet, op. cit., pp.261-262; J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.256-257. しかしながら，ドリオの提案は，「正当な」利潤と余剰利潤とのあいだにどういう点で線を引くべきか，どういう組織がそれを決定するのか，労使協調団体主義の労働組織か，あるいは労使協調全国協議会かなど，細目においてあいまいなままであり，また，労使協調団体の頂点であるその全国協議会には企業のもっとも「責任ある」3構成員，労働者，経営者，技術者が座るべきだとドリオは主張したが，それぞれがどのような比率で席を占めるべきかは明記しなかった。R. Soucy, *op. cit*., pp.248-249, (traduction française) *op. cit*., pp.348-349.

[152] *L'Emancipation nationale*, 27 mars 1937.

[153] J-P. Brunet, op. cit., p.261; J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.256.

[154] *L'Emancipation nationale*, 2 janvier 1937.

[155] P. Milza, *op. cit*., pp.44, 168; J-P. Brunet, op. cit., pp.262-263; J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.258; 竹岡前掲書, pp.746-749.

[156] Robert Loustau, *Justice sociale, économie humaine*, Parti populaire français, Paris, 1936.

途の制限も――その使途が「道義的」限度内にとどまるかぎり――まったく考えられてはいなかった。資本主義の基礎そのものはこのように生かしたまま，それがめざしていたのは労使協調団体主義（コーポラティズム）にもとづく改良主義の道であった。

経営者団体からの資金援助だけでなく中産階級からの支持もえたいという願望は，フランス人民党の社会主義的，革命的側面を弱め，結成時の革命的情熱はまもなく失われたのであった。フランス人民党のこのような変化は，同党の「ファシズム」が，イタリアのファシズムとは違って，最初から「資本家階級の若干のグループによって一部遠隔操作されていた[157]」という事実以上に，「フランス社会が全体として同党にたいしてみせた抵抗の関数[158]」だったのであろう。

政治的分野では，フランス人民党が勧告した制度改革はかならずしもファシスト的ではなく，『フランス改造』のなかで，ドリオは「われわれは共和主義者としてとどまる」と明言している。ただ，すぐそのあとで，それは「問題がいまのところ熟していないようにおもわれるからである」とつけくわえている[159]のは事実である。将来にたいするいかなる魂胆があったにせよ，ドリオは公然とは議会制の廃止を主張することはなかった。かれが要求したのは，議会の役割をその調整機能だけにとどめ，政府に国の運営を任せて行政権を強化するということだけであった。そして，ドリオが「過渡的」とみなした現行制度の枠内では，かれは比例投票制を採用し，国民投票制度を導入し，議会の権限を国家予算の問題だけに制限するよう勧告するにとどまったのである[160]。

[157] Pierre Milza et Marianne Benteli, *Le fascisme au XXe siècle*, Editions Richelieu, Paris, 1973, p. 237.
[158] J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p. 258.
[159] J. Doriot, *Refaire la France, op. cit.*, pp. 103 - 104.
[160] J. Doriot, *ibid.*, pp. 104 - 105.

ドリオとフランス人民党の指導的幹部たちは，このように，行政権を強化し，職業団体と労働組合との代表によって構成された経済評議会を設置する労使協調団体主義的な「共和制国家」の建設と改革を呼びかけたのであった[161]が，それが刷新能力をみずからのうちにもつ国民投票にもとづいた共和制国家なのか，あるいは深刻な国家的危機の到来によって必要となる独裁国家なのかという点は，あいまいなままであった。そのような中央権力の性質の問題以上に，かれらの関心を引きとめたのは，国家・国民の深い層，すなわち家族，同業組合，市町村（コミューヌ），地域――というよりはむしろ，フランスの政治・経済・社会生活の自然の枠組となっている「地方」――であった。かれらが主張したのは，家族，市町村（コミューヌ），地域に「フランス人民国家」の基礎を置いた，行政の地方分権化であった。ドリオが望んだのは，「民衆的な」，地方分権化された国家であった[162]。そして，ドリオとフランス人民党のリーダーたちは，かれらが将来的に建設しようと望んだこの「フランス人民国家」が，議会を，本国と植民地との全国的，地域的な経済的，社会的利益代表によって構成された，労使協調団体主義的で，諮問的な会議に変えるべきだと主張したのであった[163]。

フランス人民党にとっては，国民的刷新の鍵となるべきはフランス「人民」の結合であっ

[161] しかし，その制度改革のプログラムはきわめてばくぜんとしていたといわざるをえず，行政権の強化や職業団体については，さまざまな解釈が可能であった。Ph. Burrin, *op. cit.*, p. 281 ; Ariane Chebel d'Appollonia, *L'extrême-droite en France. De Maurras à Le Pen*, Editions Complexe, Paris, 1988, p. 209.
[162] この点では，ドリオやフランス人民党のリーダーたちの願望は，アクシヨン・フランセーズのシャルル・モーラスの見解やフランス・ナショナリズムの文化的伝統と類似していて，かれらの「ファシズム」がフランス右翼の伝統という限界から解放されてはいなかったことが分かる。P. Milza, *op. cit.*, p. 173.
[163] J. Doriot, *Refaire la France, op. cit.*, pp. 101 - 103 ; J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.,* p. 259.

たが，「人民」とはいったいなにかについて，1939 年 6 月 16 日の『国民解放』紙で，元『ユマニテ』紙の記者ポール・ギタールがつぎのような興味深い定義をしている。「人民であるならだれでも，その靴でフランスの大地を踏んでいる。人民であるならだれでも，この大地からその血の声とその死者の声が上がってくるのを聞くことができよう[164]。」それは，まるで，個人の深層を伝統とナショナリズム，フランスの大地とその死者の声のなかに求めたモーリス・バレス[165]をおもわせる文章であった。ドリオがフランス人民党第 2 回全国大会の演説の最後で引用したのは，まさしくこの「大地と死者」の詩人モーリス・バレスであり，フランス人民党の党員は「闘士で英雄」であるべきで，「“古強者（つわもの）の民族よ，目覚めよ，君たちの指導者の気力が衰えているのだ，だから，君たちが君たちの主人（あるじ）となれ”と戦前モーリス・バレスが投げかけた感嘆すべき呼びかけを繰り返しおこなうべきだ」とドリオはいったのである[166]。

同様に，フランス人民党のリーダーたち（ベルトラン・ド・ジュヴネルと在郷軍人作家協会副委員長ジャック・ブーランジェ）によれば，「国民」をもっとも深いところでつくりあげているのは，共同体のメンバーを結びつけている集合的意識であり，共通した性質の感情であった[167]。サン・ドニ市のフランス人民党が，共産党時代には，1914 − 1918 年の大戦の休戦記念日（11 月 11 日）の愛国的デモを排斥し，大戦の死者に捧げる記念碑を建てるのを拒否していたにもかかわらず，その後，このような記念碑を建立するための運動の先頭に立ち（その礎石は 1938 年 11 月 11 日に築かれた），愛国的性格のデモを繰り返しおこなうようになったのも，そのためであった。

1938 年に公にされたフランス人民党の綱領（起草者ポール・マリヨン）のつぎのような一節にみるように，フランス人民党がフランス史の過去の完全な一体性を主張し，その偉大な瞬間にみずからを結びつけようとしたのも，同じ精神からであった。「われわれのフランス人民国家は，われわれの偉大な伝統のすべて――カペー朝の王たちやジャコバンの伝統――，われわれの偉大な改革のすべて――リシュリュー，コルベール，ナポレオン，第 3 共和制の改革――，われわれの偉大な思想のすべて――サン・シモン，フーリエ，プルードン，ル・プレー，ラ・トゥール・デュ・パンの思想――，われわれの偉大な名前のすべて――ジャンヌ・ダルクからクレマンソーまで――を融合し改良するために同じるつぼのなかに投じるであろう[168]。」

ジャコバン主義の遺産は，その愛国的側面だけを受け継ごうとされた。1793 年に山岳派（モンタニャール）が政権を掌握した政府の統治の仕方は，ドリュ・ラ・ロシェルの考えでは，ヒ

[164] *L'Emancipation nationale*, 16 juin 1939.

[165]『自我の崇拝』（1888-1891 年）から出発して，個人の深層を伝統とナショナリズムのなかにみいだしたフランスの小説家，エッセイスト。文学史家アルベール・ティボーデは，バレスの思想の背後に，反ユダヤ主義の強い，国家社会主義の信念が予兆としてみいだされると指摘した。また，ロバート・サウシーはバレスの思想をファシズムの前兆であったとし，ゼーフ・ステルネルも，バレスの思想のなかに，絶対的な大衆信仰，匿名の動物的群衆のなかでの自我の忘却，民族の共通の意志と運命を体現する指導者の英雄的行為や力強さへのほとんどニーチェ的な情熱，国民を生物学的に構成するもの――「大地と死者」――にたいする本能的愛着がみられるとして，かれをファシズムの先駆者としている。Albert Thibaudet, *Histoire de la littérature française de 1789 à nos jours*, Stock, Paris, 1936, p.476; Robert Soucy, *Fascism in France. The Case of Maurice Barrès*, University of California Press, Berkley, Los Angeles, London, 1972; Zeev Sternhell, *Maurice Barrès et le nationalisme français*, Presses de Sciences-po, Armand Colin, Paris, 1972, Arthème Fayard, Paris, 2000; 竹岡前掲書, pp.731-733.

[166] J. Doriot, *Refaire la France, op. cit.*, p.127.

[167] *L'Emancipation nationale*, 14 novembre 1936 (article de Bertrand de Jouvenel) et 24 juin 1938 (article de Jacques Boulanger).

[168] Cit. par D. Wolf, *op. cit.*, p.302. 平瀬・吉田訳, p.303.

トラー，ムッソリーニあるいはスターリンのそれにあまりにも似ていた[169]。フランス人民党にとって，フランス史上の偉大な人物はとりわけジャンヌ・ダルクであり，1937 年から毎年 5 月 10 日に，同党はフランスのカトリック右翼のヒロイン，ジャンヌ・ダルクの像に花輪をたむけ，青色のシャツを着た警備係のメンバーを先頭に，党首脳部全員が揃って参加した盛大な行進をおこなった。それは，5 世紀間のフランスの歴史がジャンヌ・ダルクの名を祖国解放のシンボルとして神聖化していたからであり，また，アクシヨン・フランセーズによるジャンヌ・ダルク崇拝の独占からそのシンボルを奪い取ろうとしたものであり，さらにまた，共産党が，その愛国主義的回心のなかで，ジャンヌ・ダルク記念祭にデモを始めようとしていた意図をくじこうとしたためでもあったろう。ポール・マリヨンは，『国民解放』紙上で，フランス人民党が，わずか数日の間隔で，ジャンヌ・ダルクの像と 1871 年のパリ・コミューンの記念碑，国民兵の壁[170]とに花輪を捧げたフランスで唯一の政党であることを誇らしげに語っている[171]。

それでは，フランス人民党とキリスト教との関係をどのように考えるべきであろうか。同党は教権拡張主義であったのか，それとも反教権主義であったのか。ドリオ自身は，この問題についてはほとんど語っていないが，しかし，かれは如才なく共産党員であったかれの過去から漂い出る反教権主義的側面を和らげようとつとめ，「国民革命」の基礎のひとつとかれにはおもわれたカトリック教会の機嫌をそこねないように気をつけた。そして，フランス人民党の家族重視――家族は「フランス人民国家」においては「国民の基本的な構成単位」とされた――や，フランスに「現在十分ではない子供たちの数」が回復するとともに，家族に「生きることへの意欲と生長していく喜び」をとり戻させなければならないという同党の主張[172]は，カトリック教会の関心を引かざるをえないであろうと考えられたのであった。

同様にまた，ドリュ・ラ・ロシェルは，「フランス・ブルジョワジーの退廃」を厳しく批判し，その退廃の原因をデカルト哲学，古典主義，合理主義，プロテスタンティズムなどの影響に帰し，救済的価値観，家族崇拝，スポーツ，大地への回帰を賛美したのであった。そして，かれは，つぎのような言葉で定義したファシズムのなかに，ブルジョワジーの退廃を打破する「新しい人間」を創造するための効果的方法をみいだすことができると信じたのであった[173]。「ファシズムのもっとも深い定義は，つぎのごとくである。それはもっとも率直に，もっとも根源的に，風俗習慣の大革命に向かって，肉体の回復――健康，品位，充実，ヒロイズム――に向かって，そして，大都市と機械に反対し人間の擁護に向かって突き進む政治

[169] *L'Emancipation nationale*, 10 septembre 1937,《Le PPF, parti de l'esprit vivant》.

[170] パリ 20 区ペール・ラシェーズ墓地の壁，そこでパリ・コミューンの兵士が銃殺された。

[171]「フランス人民党は，その教義，その綱領と完全に一致した行為として，数日の間隔で，2 つの花輪を，ひとつはジャンヌ・ダルク像の足もとに，もうひとつはパリ・コミューンの国民兵の壁に置いた唯一の政党である。」*L'Emancipation nationale*, 5 juin 1937. ピエール・ミルザは，ドリオが，強い農民の復活を主張し，ジャンヌ・ダルク崇拝とパリ・コミューン国民兵崇拝とを結びつけたことによって，モーリス・バレスの言説と結びついたのではなかったろうかと書いている。P. Milza, *op. cit*., p.174; R. Soucy, *French Fascism: The Second Wave, 1933-1939*, *op. cit*., p.252, (traduction française) *Fascisme français, 1933-1939. Mouvements antidémocratiques, op. cit*., p.354. ドリオは，その著書『フランス改造』のなかで，とくに農民に言及し，「1921 年以来，フランスでは農民の数が 15 パーセント減少したのにたいして，農民階級の総所得は 45 パーセント低下した。国の将来は農民の復活と深く結びついている」といい，このように経済発展によって押しつぶされたフランス農民の救済と保護を要求している。J. Doriot, *Refaire la France, op. cit*., pp.24-26.

[172] J. Doriot, *ibid*., pp.97-98.

[173] D. Wolf, *op. cit*., pp.310-311. 平瀬・吉田訳, pp.309-310; J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.261-262.

運動である[174]。」このように要約し単純化したファシズムにたいして，ドリュ・ラ・ロシェルはカトリック教会の支持を当てにしていたようであった。1936年8月の『国民解放』紙上で，かれは，中世の大聖堂の建設を実現させた「全員一致の信仰」と1936年のフランス人民党のナショナリズムの発露とを関連づけ，「歌い，叫び，腕を振り，指をほぐして，聖霊を呼びなさい。聖霊はあなた方のなかに降りてくるでしょう。あなた方はヨーロッパにその大聖堂を，あの集合的飛翔と全員一致の信仰の力強い大建造物を築いた国民であることを思い起こしなさい[175]」という奇妙な呼びかけをおこない，さらに，「どうしてわれわれは長いあいだわれわれの父祖を魅惑してきた大小の巡礼をよみがえらせようとしないのだろうか[176]」とのべて，巡礼の復活を提案したのであった。

すでにみたように，政治的分野にかんしては，フランス人民党の教義は，かならずしもファシズム特有のものがあったとはいえず，その多くはナショナリストや極右の世界で一般にみられた見解と違わなかった。しかし，フランス人民党第2回全国大会で，「われわれの信条，それは祖国である。フランス人民党は，ナショナリズム以外の教義をもとうとはおもわない。それは妥協しないナショナリズムであるといおう[177]」とドリオが叫んだように，同党のナショナリズムがきわめて強硬なナショナリズムであったことには注目しておかなければならない。それは，フランス人民党がファシストの資質をもつのに不可欠な条件のひとつをそなえていたということであろう。

最後に，ドリオとフランス人民党が1940年以前に反ユダヤ主義的であったか否かという問題を検討しなければならない。反ユダヤ主義は，かならずしもファシズムの定義のなかには含まれず，ファシズムの試金石とはならない[178]が，それはイタリアのファシズムとナチズム，とりわけナチズムとの比較の重要な要素だからである。

この問題については，フランス人民党第1回全国大会のあと，『国民解放』紙は，暗に反ユダヤ感情をほのめかしながらも，中立的な立場をとり，「われわれの党は反ユダヤ主義ではない。党は大国民政党であって，ユダヤ人とたたかうなどしてはいられず，それよりもっと大切な仕事がある。われわれは，ユダヤ人を擁護するつもりもユダヤ人を攻撃するつもりもない・・・われわれはユダヤ教徒のフランス人とは争わない。しかし，自分がフランス人であると感じるまえにユダヤ人であると公言する人びとは拒絶する。われわれは，ある種の市民たちがかれらの民族的利益を国民的利益に優先させていることを容認しない」と書いている[179]。その翌年，ドリオは，フランス人民党の学生たちが反ユダヤ主義にたいするかれの態度を質問したとき，「自分個人はユダヤ人でもフリー・メーソンでもないが，フランスが共産主義から解放されないかぎり，そんな愚劣なことにかまけるのはごめんだ」と返答している[180]。

既述したフランス人民党の――すくなくとも発足当初の――重要な資金提供者のなかには，ロートシルド，ラザール，ヴォルムスの3つの

[174] *L'Emancipation nationale*, 13 août 1937.
[175] *L'Emancipation nationale*, 1er août 1936.
[176] *L'Emancipation nationale*, 9 septembre 1938.
[177] J. Doriot, *Refaire la France, op. cit.*, p.94.
[178] R. Soucy, *French Fascism: The Seconde Wave, 1933-1939, op. cit.*, pp.12-13, 152, (traduction française) *Fascisme français, 1933-1939. Mouvements antidémocratiques, op. cit.*, pp.38-40, 226; Pascal Ory, *Du fascisme*, Perrin, Paris, 2008, pp.26, 191-192, 288.
[179] *L'Emancipation nationale*, numéro spécial consacré au premier congrès du PPF, 14 novembre 1936, cit. par D, Wolf, *op. cit.*, p.313. 平瀬・吉田訳, pp.312-313 et aussi par Laurent Kestel, *La conversion politique. Doriot, le PPF et la question du fascisme français*, Editions Raisons d'agir, Paris, 2012, p.179.
[180] *L'Etudiant français*, 10 juin 1937; D, Wolf, *ibid.*, p.312. 平瀬・吉田訳, p.312.

ユダヤ系銀行が数えられた。また，ドリオの参謀スタッフのなかには，ユダヤ系出身の政治局メンバーで「労資協調同業組合」問題の責任者アレクサンドル・アブランスキーや，母親がユダヤ人のベルトラン・ド・ジュヴネルがいた。しかし，そのような事実は，ポール・マリヨン，アベル・ボナール，とりわけピエール・ドリュ・ラ・ロシェルなど党首脳部にいた反ユダヤ主義者たちの重要な影響力に比較すれば，とるに足らないことでしかなかった。それにベルトラン・ド・ジュヴネルは 1939 年 1 月にフランス人民党を去り，アブランスキーは 1938 年 2 月に自動車事故で死亡した。ドリオはかれの死に動揺し，弔辞のなかでアブランスキーの生涯を理想化し，かれが「フランスの古い地方で」育ったと語ったが，かれがユダヤ人であるという事実にはけっして触れなかった[181]。しかし，アブランスキーの死は，それまでフランス人民党内で反ユダヤ主義の発展を抑え込んでいた党員たちのためらいを取り除いたようにおもわれる。

反ユダヤ主義は，基本的には，アルジェリアの地で広がった。1938 年以前にも，1936 年 7 月 11 日の『国民解放』紙上で，フランス人民党の植民地問題専門家ジョルジュ・ルーがアルジェリアにおけるいわゆる「ユダヤ人問題」の存在を提起していた。これが同紙の掲載した最初の反ユダヤ主義の記事であった。また，1936 年 12 月 19 日の『国民解放』紙は，フランスが今日，その植民地で，「人びとに軽蔑されているユダヤ人たちと人びとに恐れられている共産主義者たちとの，2 重の支配」を受けていると主張した[182]。アルジェリアでは，イスラム教徒のアルジェリア人に漸進的にフランスの市民権をあたえることを目的にしたブルム＝ヴィオレット法案（1936 年 12 月 30 日に下院に上呈）に反対し，アルジェリアのユダヤ人全員にフランスの市民権をあたえたクレミュー政令（1870 年）の廃止に賛成するキャンペーンが広がり，それとともに，ユダヤ人の「解放」のなかにイスラム教徒へのフランス市民権拡大の第一歩をみたアルジェリア在住のフランス人のあいだに，反ユダヤ主義はきわめて強力な右翼過激主義的傾向を助長した。

しかし，1936 － 1937 年には，フランス人民党の機関紙に反ユダヤ主義の記事をみいだすのはまれであり，反ユダヤ主義はフランス人民党内で公式には市民権をえていなかった。事態が変化したのは，とくに 1938 年 3 月の党大会以降であった。この大会でヴィクトル・アリギが北アフリカの「ユダヤ人問題」について語り，ユダヤ人たちが「自分たちをフランス人であると感じるまえにユダヤ人であると感じている」と非難し，かれらこそ「唯一の人種主義者」だと非難した[183]。さらに，1938 年 11 月には，フランス人民党北アフリカ支部の第 2 回大会で，アリギは，激しい言葉で「わが国の国民でもなく，われわれと同じ土地に生まれた者でもなく，われわれと同じ血も流れず，わが国の歴史をかつぎ出すこともできないのに，わが国を支配し国民を隷従させている者たちがたくさんいるが，かれらにはもううんざりだ。これらの人種にあたえられる身分はただひとつ・・・外国人という身分である。アルジェリアでは，クレミュー政令を廃止し，ユダヤ人をかれら本来の外国の国民に戻さなければならない。本国では，戦後認められたユダヤ人の帰化を見直さなければならない・・・われわれはいう，“権力をフランス人に取り戻せ”と」とのべた[184]。この大会で採用された綱領には，「北アフリカはユダヤ人の支配力から完全に解放されなけれ

[181] P. Hollemart, *op. cit*., p. 58.
[182] *L'Emancipation nationale*, 19 décembre 1936,《La France a un grand empire, l'aura-t-elle encore demain? 》
[183] *L'Emancipation nationale*, 19 mars 1938.
[184] Paul Guitard, *SOS Afrique du Nord*, Les Œuvres françaises, Paris, 1938, cit. par Marc Knobel, *Doriot, le PPF et les juifs*, mémoire de l'Institut d'Etudes Politiques de Paris, 1984

ばならない。フランス人民党は北アフリカからユダヤ人を追放するであろう」と記載されていた[185]。

ピエール・ドリュ・ラ・ロシェルの攻撃的な反ユダヤ主義の主張も，かれの親ファシズム宣言の小説『ジル』の刊行（1938年）以前にはさかのぼらないようにおもわれる[186]。かれの反ユダヤ主義にたいしては，おそらく，フランス人民党への入党が重要な役割を演じたにちがいない。1936年6月から1937年中頃まで，『国民解放』紙に発表されたかれの論説には，反ユダヤ主義の主張をみいだすことはできない。ドリュ・ラ・ロシェルがはじめて『国民解放』紙でユダヤ人を直接攻撃したのは，1937年6月5日であり，人民戦線政府の首相レオン・ブルムの人柄にかんしてであった[187]。しかし，そのブルム批判も，翌年以降のドリュ・ラ・ロシェルの激しい反ユダヤ主義の論調とはくらべるべくもない。1938年は，フランス人民党の知識人たち（とりわけドリュ・ラ・ロシェル）のあいだに反ユダヤ主義が急激に広がった年であった[188]。

ドリュ・ラ・ロシェルは，1938年7月，『国民解放』紙の「人種差別について」と題した論説のなかで，「ユダヤ人問題」を生物学的観点から考察し，「ユダヤ人とヨーロッパ人との異種交配」が引き起こしている「不都合」を強調して，「みずからの運命の主人であるヨーロッパの諸国民は，ひとつの国民――あるいはすべての国民――の上に立とうとしているユダヤ人の野望をいかに扱うべきか」と問い，この問題を解決するために，フランス国籍の取得条件にかんする1927年の法律を撤廃し，「なんらかの職業に従事し政治的権利を行使することをユダヤ人に許すまえに，2世代の期間」を必要とし，「すべてのマルクス主義のユダヤ人，すなわち，社会の破壊を公言するすべてのユダヤ人を追放する」権利を政府当局にあたえる，ユダヤ人のための身分規定の制定を要求した。あきらかに，ドリュ・ラ・ロシェルは，そうとは白状していないが，1933年9月，ドイツ人とユダヤ人とのあいだの結婚および婚外の性的関係を禁止し，ドイツ人の純血を守るために，ニュールンベルクのナチス党大会で発表された，いわゆるニュールンベルク人種法から着想をえたのであろう。こうして，反ユダヤ主義は，以後，フ

[185] この綱領はフランス人民党発行のパンフレット《groupe musulman nord-africain》に採録された。*Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 340.

[186] Robert Soucy, Le fascisme de Drieu la Rochelle, *Revue d'histoire de Seconde Guerre mondiale*, 66, avril 1967, pp.61-84; Robert Soucy, *Fascist Intellecturel. Drieu La Rochelle*, University of California Press, Berkeley, Los Angeles, London, 1979, pp.82-90, 202. ピエール・アンドルーとフレデリク・グロヴェールは，ドリュ・ラ・ロシェルが『ファシスト社会主義』刊行の年，1934年に最初の反ユダヤ主義の主張をしたとしているが，しかし，シャルロット・ヴァルディは，1936年までは，ドリュ・ラ・ロシェルの反ユダヤ主義のいかなる痕跡もみつけることはできないとしている。Pierre Andreu et Frédéric Grover, *Drieu la Rochelle*, Hachette Littérature, Paris, 1979, p.260; Charlotte Wardi, Drieu et les juifs, in Marc Hanrez dir., *Pierre Drieu La Rochelle*, Les Cahiers de l'Herne, 1982, p, 290. なお，小説『ジル』の邦訳は若林眞訳，集英社，1967年。

[187]「ブルムはむしろジノヴィエフやカメーネフに似ている。これらの狡猾なタルムード学者と同じように，スターリンにたいする不安でかれの胃はきりきり痛んでいる。」*L'Emancipation nationale*, 5 juin 1937.

[188] しかし，この反ユダヤ主義の大波は，フランス人民党の枠を大きく越え，政治，新聞，文学の世界全体に達する現象であった。極右の週刊紙『ジュ・シュイ・パルトゥー』の1938年4月15日の「ユダヤ人とフランス」と題された特集号は，版を重ね，大成功を収めた。1938年は，反ユダヤ主義的性格の政治グループ，雑誌や新聞（『挑戦』，『農業新聞』，『ル・マタン』，『ル・ジュール』など）の進出や拡大をみた年であった。Paul J. Kingston, *Anti-Semitism in France during the 1930s. Organisations, Personalities and Propaganda*, University of Hull, Ocasional Papers in Modern Languages, 14, London, 1983; Ralph Schor, *L'Antisémitisme en France pendant les années trente*, Complexe, Bruxelles, 1991, p.26 sq.. セルジュ・ベルスタンも，1938-1939年には，「反ユダヤ主義と外国人嫌いが人文主義者や民主主義者とみなされた人びとのあいだにまで広がり，いくつかの急進党系の新聞も，極右の新聞の論説ほど論調が攻撃的ではないという点が違うだけの，反ユダヤ主義の論説を掲載した」ことを認めている。Serge Berstein, L'affrontement stimulé des années trente, *Vingtième siècle*, 5, janvier-mars 1985, p.91.

ランス人民党のなかで明確な市民権をもつにいたった。

ドリオ自身は，どうであったか。かれは，1938 年 4 月 3 日，はじめてこの問題を取り上げ，かれが「原則的な反ユダヤ主義者」ではないとしながらも，政府にレオン・ブルムが存在していることが「ユダヤ人問題を再提起」しつつあるといい，「ブルムと同じ人種の人びとは，真先にかれが政権から立ち去るのを望むべきであろう」と主張した[189]。第 2 次レオン・ブルム内閣が総辞職する直前のことであった。

ユダヤ人問題にかんするフランス人民党のこのような方向転換は，なによりも，ユダヤ人が「アルジェリアの選挙区，とりわけコンスタンティーヌで，堅固でかなり重要な左翼ブロックを形成していた」からであった。「このような選挙区の情勢からもっとも過激な結論を引き出したのがヴィクトル・アリギであり，ドリオの真剣な戦術的自制にもかかわらず・・・アリギは，オランであからさまな反ユダヤ主義キャンペーンを開始した」（ウィリアム・アーヴィン[190]）のであった。

北アフリカ支部の反ユダヤ主義の影響を受けて，フランス本国でも，フランス人民党の反ユダヤ主義は，その激しい外国人嫌いのうえに接ぎ木されていった。ポール・マリヨンはアクシヨン・フランセーズのシャルル・モーラスの文章から借用した「よそ者（メテーク）」という表現を使用し，党幹部のひとりは，『国民解放』紙上で，外国人の就くことのできる職業を厳しく限定し，外国人に「血にたいする賠償金を代償する特別税」を課すという法令の公布を提案している[191]。『国民解放』紙（1938 年 5 月 27 日）に「ユダヤ・ボルシェヴィキ」という表現が初めて登場したのは，この外国人嫌いの主張のなかにおいてであった[192]。この日の『国民解放』紙は，数日まえの 1938 年 5 月 24 日のフランス人民党政治局の声明を掲載したが，そこには「ユダヤ・マルクス主義」という言葉が使われていた。これより先，自分自身ユダヤ系であったベルトラン・ド・ジュヴネルが，『自由』紙（1938 年 3 月 18 日）で，人民戦線内閣の首相でフランス最初のユダヤ人の首相レオン・ブルムを攻撃し，「ブルムはフランスの敵である。かれは今日の午後，自分で政権の座を下りるべきではない。かれは足で蹴られて追い払われるべきである。2 度にわたってフランスを統治するという栄誉をになったこの男は，わが国をすこしも愛してはいない。かれはわが国を憎み，わが国を破壊するために最大の努力を払った」と書いていた[193]。第 2 次レオン・ブルム内閣が総辞職したのは，この 3 週間後である。

ヒトラーがチェコスロヴァキア領ズデーテン地方のドイツへの割譲を要求して戦争の危機が高まった 1938 年 9 月には，「戦争の党（共産党）」と同盟を結んでいる「ユダヤ人一味」という表現が多用された[194]。また，ドリュ・ラ・ロシェルは，シャルル・モーラスがユダヤ人問題の生物学的側面を忘れ，その政治的，文化的側面にしか目を向けていないことを非難した[195]。こうして，結党当初はとくに人種差別主義的ではなかったフランス人民党は，1938 年以後，しだいにはっきりとした反ユダヤ主義の姿勢へと転じたのであり，反ユダヤ主義を構成するすべての要素が，すでに第 2 次世界大戦勃発以前のフランス人民党のなかに存在していたのである[196]。

---

[189] *La Liberté*, 3 avril 1938.
[190] William D. Irvine, Fascism in France and the Strange Case of the Croix de Feu, *Journal of Modern History*, 63, June 1991, pp. 292-293.
[191] *L'Emancipation nationale*, 21 novembre 1938.
[192] *L'Emancipation nationale*, 27 mai 1938.
[193] *La Liberté*, 18 mars 1938.
[194] P. Hollemart, *op. cit*., pp. 120-121.
[195] *L'Emancipation nationale*, 23 juillet 1938,《A propos de l'antisémitisme》.
[196] ただし，ドリオは反ユダヤ主義にかんしてはほとんど表舞台には出ず，北アフリカにおけるヴィクトル・アリギの行動を批判している。これにたいして，アリギは，1939 年 1 月にフランス人民党を去るとき，

以上みてきたことから，フランス人民党は，フランスの政治風土の独自性の反映である固有の特徴をもちながらも，その儀式上の慣行において，その政治行動において，その社会・経済的教義において，そして，その党員たちの政治的，社会的出自において，真正のファシスト政党であったと結論することが許されよう。たとえ，ドリオとかれの補佐役たちの大部分が，第2次世界大戦勃発まで，ファシズムというレッテルを拒否したとしても，たとえ，かれらのファシズムが，イタリアのファシズムとはちがって，最初から，資本家たちの若干のグループによって一部遠隔操作されていた[197]としても，また，たとえ，フランス人民党が，のちにみるように，戦争前夜には，そのもっとも鋭敏な側面を和らげ，ファシズムの特徴を弱める日和見主義的偏流を経験したとしてもである。忘れてはならないのは，ファシスト政党はそれが政権を掌握したときにしか，そのすべての能力，その真の顔をみせないということである。

それでは，出発点においてコミンテルンの反ファシズムによって養育された人物が，ナチス体制との協力者として，その人生の最後を終えるという謎をどう説明したらよいのだろうか。ジャン・ポール・ブリュネは，ドリオの共産主義からファシズムへの偏流の行程がとりわけ興味深いのは，フランス人民党の経験に照らして，ファシズムと共産主義，ファシズムと社会主義とのあいだの潜在的な親近性がよく理解できるからであるといっている。そして，ブリュネは，ドリオとドリオの後を追った多数の共産党員もしくは元共産党員――その数は3万人から4万人に達したであろう――が，共産主義がかれら自身にとってもフランスにとっても袋小路でしかないことをはっきりと自覚し，かれらの確信にしたがって行動しようと決心したとき，フランス人民党に集まってファシストになったのであるといい，その理由を，この共産主義とファシズムの親近性に求めている[198]。

たしかに，共産主義とファシズムとのあいだには，両者の重要な教義上の相違にもかかわらず，あきらかな類似性（政府と一体化した単一政党の重要な役割，遍在する秘密警察，「新しい人間」への熱狂的礼賛，カリスマ的指導者にたいするほとんど宗教的な称揚）の存在していることは否定できない[199]。政権を掌握したとき，共産主義とファシズムは，ともに全体主義の意志，すなわち国民をいやおうなしに隷属状態に引きずり込むやり方によって「国民を幸福にしようとする」意志をもって，政権を行使したのである。

また，たしかに，政党組織という点からみても，フランス人民党の組織は，ドリオとその主要な協力者たちが長いあいだ党員として活動していた共産党の組織――かれらはその優秀さと効率を高く評価していた[200]――をそっくり敷き写したものであった。地方の政治スタッフの集列化や周辺組織にたいする中央の絶対的支配など，フランス人民党の組織は，共産党の官僚的機構のモデルをよりどころにしていた。

しかし，ドリオの共産主義からファシズムへの転向を両者の親近性によって説明し，共産主義とファシズムという2つの全体主義の思想体系の共通性がドリオに「数万のフランス人，とりわけ青年たちを幻想と誤った確信の道へ，さらには恥辱と背信に導いた悪い羊飼い」（ジャ

ドリオに差し出した手紙のなかで，このような党首の態度を非難している。

197) P. Milza et M. Benteli, *op. cit*., p. 237.

198) J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp. 264-266.

199) ハナ・アーレント（Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism*, Harcourt, Brace & World Inc. New York, 1968, 大久保和郎・大島通義・大島かおり訳『全体主義の起源』みすず書房，1972-1974年）を始めとして，共産主義とファシズムの類似性を主張している論者は数多い。

200) Maurice Tréand,《Jacques Doriot et le Parti populaire français》, rapport sans date, RGASPI (Archives d'Etat d'histoire sociale et politique), Moskva, 495/10a/13/27-28; L. Kestel, *op. cit*., pp. 202-203.

ン・ポール・ブリュネ[201]）になる素質をあたえたと考えるならば，それは単純にすぎよう。実際には，フランス敗戦後のヴィシー政権下，ナチス占領軍に協力したフランス人指導者の大多数は，けっして元共産党員ではなかったのである[202]。

また，ドリオのファシズムへの偏流は，かれの個人的経験の結果であっただけでなく，時代の政治的発展をかれがはっきり意識した結果でもあったにちがいない。1927 年における中国での惨憺たる経験，スターリン主義の仮借ない姿がむき出しになっていった政治的現実は，ドリオにかれの共産主義の信念を喪失させたことであろう。さらに，コミンテルンと共産党の戦術転換とそれをめぐる党内抗争が，その後のかれの進路に決定的な影響をあたえた。しかし，それだけではなかったであろう。恐慌の進行，人民戦線の結成，仏ソ相互援助条約の締結（1935 年），スペイン内戦，スターリンの政治的策謀，不況の長期化，ミュンヘン協定（1938 年）など，国内外の政治，経済状況の動きもまた，ドリオの「急進化」と「ファシズムへの偏流」を促す重要な要因として作用したことであろう。

---

[201] J-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.500.

[202] 2 つの全体主義思想体系――共産主義とファシズム――の政治的，イデオロギー的類似性という仮説にもとづいて，「自由主義者」や「民主主義者」より労働者政党の党員たちのほうがファシズムの活動家になることが容易であったとする主張も，成り立ちがたいとおもわれる。この点にかんしてすくなくともいえることは，ヴィシー政権下，対独協力に走ったフランス人の大多数は，元共産党員ではなく，早期からのファシストでもなかったということである。労働者たちがファシズムに走りやすい傾向がもっとも強いという考えは事実に反し，他方で，ドイツやイタリアの自由主義ブルジョワジーがファシズムの誘惑にたいして免疫をもっていなかったことも事実である。実際には，両大戦間のフランス共産党離反者の大部分は，社会党（SFIO）に加わるか，あるいは，トロツキズムという共産主義的理想に回帰していったことが確認されている。L. Kestle, *op. cit.*, pp.7-8.

Jacques Doriot et le Parti populaire français de 1936 à 1940. 2

Yukiharu Takeoka

La fondation, en juin 1936, du Parti populaire français par l'ancien communiste Jacques Doriot marque la naissance du premier parti fasciste français de masse. Dans quel sens le Parti populaire français était-il fasciste? Il est aujourd'hui communément admis que l'idéologie n'occupe pas une place fondamentalement plus importante au sein d'un parti fasciste que dans n'importe quel autre courant politique. La réponse réside d'abord donc dans le comportement du Parti populaire français. Dès son premier congrès en novembre 1936, son comportement apparait comme dépourvu d'ambiguïté. Par son cérémonial, par son organisation et son comportement politique, par la sociologie de ses adhérents et sa doctrine, voire par ses liens avec le fasicisme italien, le Parti populaire français peut être considéré comme le seul parti fasciste de masse que la France ait connu.

Au printemps de 1937, Doriot a émis l'idée de la formation d'un Front de la Liberté, organisation coopérative anti-marxiste et engagé des négociations avec un certain nombre de parties et mouvements de droite. Mais le rejet final d'adhésion du Parti social français de François de la Rocque, en particulier, a fait échouer la tentative de Doriot. Pour le Parti populaire français, les accords de Munich, signé le 30 septembre 1938, furent l'occasion d'une très grave crise. Le défaitisme de Doriot devant la crise de Munich a causé la démission de plusieurs membres de son état-major et des intellectuels influents. Abandonné par tous ceux qui ont jugé que Doriot ne pouvait pas devenir un Mussolini français et ayant peu à peu perdu l'apppui des masse et, soutout, du milieu des affaires, le Parti populaire français ne représentait plus qu'une force marginale, de plus en plus nettement rangée à la droite traditionaliste, à la veille de la deuxième guerre mondiale.

Classification JEL:N44
Mots-clés: Doriot, communisme, fascisme